本を選ぶ

NO.444 2022年(令和4年)5月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

http://www.las2005.com

本社 〒114-0002 東京都北区王子4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぽわん>乳 香 再々

●司書の眼 第４８回

ろん・ぽわん

乳香 再々

つい毎朝読んでしまう多和田葉子の新聞連載小説「白鶴亮翅（はっかくりょうし）」は、特に筋立てもなく展開するのだが、細かな比喩や情景描写が楽しみだ。「目の前で信号が赤に変わり足をとめると、その赤を切り刻むように細い雨が降り始めた」。病院からの帰り道、信号が青になって通りを渡りながらそんな一節を思い出した。

小雨の降る中、薬局に寄って薬を受け取る順番を外で待っていると、無数に垂れ下がった小さな蕾がふと目に入った。エゴノキのようだ。花が開けばついこの間まで地上に咲いていたスノードロップのように愛らしい。秋になって実になると、野鳥がさかんにやってくる。鳥に詳しい人の話だと特定の鳥しか食べないという。ヤマガラだ。木の実と特定の鳥との関係は興味深い。エゴノキの実には毒があり、他の鳥たちが敬遠するのをよそに硬い種になったところをヤマガラが好んで採っては冬に備えて貯め込むのだそうだ。これを貯食行動というらしい。

エゴノキと言えば安息香（ベンゾイエ）を思い起こす。東南アジアに植生するエゴノキの仲間からとれる樹脂を原料とする香り成分で、古い時代から伝わる。樹脂を乾燥させたフレークの状態でも入手出来るが、蒸留抽出された精油が一般的だ。甘い匂いがする。

弦楽器や古典的な宮廷家具などの表面仕上げで使われるシェラックニスにも使われている。シェラックとはラックカイガラムシの分泌物が樹脂となり、それを抽出・精製して得られるもので、昔から天然ニスの主原料である。香り成分とは関係はなく、フレークをアルコールで溶いてニスの固さ調整の為に配合する。バイオリンなどの弦楽器にとってニスの硬さは音質に大きな影響が及ぶ。また硬すぎれば乾燥が進むと表面が干割れするし、逆に柔らかければ傷つきやすい。王朝家具も光沢のある仕上げと耐久性確保に活用されてきた。古くから伝わる天然の樹脂は香料としてだけでなく、人の暮らしを豊かにしてきた。

「白鶴亮翅（はっかくりょうし）」の続きだが、「Mさんは黒い傘を鞄から出して、プラネタリウムのように私たちの頭上に広げた」と、赤信号の場面が描かれる。

薬剤師の呼ぶ声がしたので、そそくさビニールのプラネタリウムをすぼめて中に入った。薬の説明を受けて会計を済ませると、いい匂いがしますね、と声を掛けられた。財布をバッグに戻す際、中にあった本からの香りに気付いたらしい。読みさしの頁にアルメニア・ペーパーの小さな短冊を挟んでいた。こちらがベンゾイエだと言うと、さすがは薬剤師、安息香ですね、と返してきた。すぐ前にエゴノキがあるでしょう、あの木の仲間からとれるらしいですよ、と話すと目を丸くしていた。漢方生薬として知っていたらしい。（埜村 太郎）

司書の眼 第４８回

―― 英語学習と英語教育――

鷹野　祐子

少し前から小学生に英語を教えているのだが、その子たちが今春中学生になったので、本格的に公立中学校の英語教科書と向き合うことになった。小学校・中学校の英語の検定教科書については、いろいろな議論がされているので、もしかしたら知っている方もいると思うが、小学校の英語授業化によって、中学生の英語授業が大きく変わっている。

ラジオ講座から

まずとりかかりに、先日まで放映されていたＮＨＫ連続テレビ小説でも取り上げられたラジオ講座から説明していこう。皆さんの中にも、学生時代や社会人になってから、英語や他の言語の講座を聞いたことのある方もいるだろう。ほぼ無料で、あらゆる言語を基礎から教えてくれる、最強のコスパ外国語学習法である。テキストを購入すればさらに深く学ぶことができるが、テキストがなくても、毎日ラジオを聞いているだけでだんだん話せるようになってくる。その国の民話・歌・今どきの流行などの日本語でも楽しめる話題を、毎回工夫して伝えてくださる講師陣には感謝しかない。

私も英語をはじめ、大学時代の第二外国語だったスペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、イタリア語、ロシア語などに挑戦したことがある。その多くは途中で挫折したが、ヨーロッパ語圏はかなり似ているので、一つを極めれば案外理解できるものである。特に海外旅行に行く機会があった時期には、旅行プランを半年前に立て、出発までにその国の言葉を習得すると学習モチベーションも高い。英語以外のラジオ講座は基礎編と応用編と別れているので、はじめてその言語に触れる初学者から、熟練まで楽しめる内容なのである。

英語のラジオ講座は、なんと戦前から開始されていた。ＮＨＫの前身、1925 年（大正 14 年）３月 22 日に東京放送局が開局され、7 月 20 日に「英語講座」が始まった。そして、1941 年 12 月８日真珠湾攻撃の翌日に、軍の外国語追放の方針により放送中止となる。４年後の 1945 年、戦後の占領軍に進駐で英語会話熱が高くなり、敗戦からわずか１か月後に「実用英語会話」「基礎英語講座」が開始された。翌 1946 年２月から 1951 年に放送された「英語会話」が大人気になり、これが、連続テレビ小説でさだまさし氏が演じていた平川唯一先生が講義した通称カムカム英語である。テキストの発行部数は月 20 ～ 30 万部に達し、手に入れるのも困難だったほどと言われている。

戦後のラジオ講座の位置づけは、学校の英語教育を補助する役割を与えられて再出発し、さらに上級生向けに「続基礎英語」、「上級基礎英語」が開設された。その後 1994 年度に学年別の講座へと移行した。学習指導要領改訂などもあり再編成され、現在英語関係の講座は、小学５年生から英語が教科化したので開設された「小学生の基礎英語」、「中学生の基礎英語１」、「同２」、オールイングリッシュで進む「中高生の基礎英語　in English」、短い時間で英会話を考える「英会話タイムトライアル」、辞書なしで英語を理解するためにシンプルな表現を学ぶ「エンジョイ・シンプル・イングリッシュ」、王道の看板番組「ラジオ英会話」。現在は「一億人の英文法」でも有名な“ハートで感じる”大西泰斗先生が担当されている。社会人のための「ニュースで学ぶ『現代英語』」、「ラジオビジネス英語」も健在である。またテレビでも英語講座があるので、日本は戦前から低コストで英語が学べる環境にあるのだ。

ラジオで毎日 15 分の番組を平日５日間聞くと週 75 分、一年 50 週としても英語を年間 62.5 時間勉強することができる。中学校では１年に英語を 140 時間学習しているので、日常会話ができるようになる語学の習得時間を最低 300 時間と考えると、中学２年生のときには英語が喋れるようになっている「はず」である。そして中学３年生ではオールイングリッシュで進む「中高生の基礎英語　in

English」を聴きこなせる「はず」なのである。そこで、新中学一年生の生徒さん達には、毎日基礎英語１を聞いてもらい、レッスンでも毎週フォローアップすることとした。

ラジオ講座創世記に東京放送局で放送していた「英語講座」の講師、岡倉由三郎（1868-1936）は、福井藩の出身で、のちの東京藝術大学の前身東京美術学校を創立した岡倉天心の弟である。彼らの父親は福井藩の下級武士であったが、藩命で武士の身分を捨て、福井藩が横浜に開いた商館の貿易商となる。父親に先見の明があり、岡倉兄弟は漢学塾や和漢塾だけでなく宣教師の開く英語塾にも通った。そういう背景で英語に堪能だった由三郎は、東京帝国大学で博言学（現在の言語学）を学んだあと、朝鮮ソウル大学の日本語学校校長を務める。その後高等師範学校や自宅で塾を開き後進の育成にあたり、研究社の『新英和大辞典』を編纂した。(参考文献：袖川裕美「教材から見るラジオ英語講座創始者の足跡」愛知県立大学外国語学部紀要第 50 号（言語・文学編），2018)

アルファベットから

岡倉が東京高等師範学校を退職し、立教大学で英文学科長を務めながら担当したラジオ講座では、本当の基礎から進んだ。ユーモラスで折り目正しい人柄を感じさせる語り口調とともに、岡倉の高い英語力は、明治人の教養の高さを思わせるに十分であったという。岡倉は特にアルファベットの教え方に苦心していて、「Ｊの字は象のお鼻によく似てる」といった文字の見え方・書き方から、「Wの発音を正確におしえる一つの方便として、熱湯を入れた湯呑み茶碗のなかの湯を、吹いてさます時の口形をして、そのまま「ウ」「ウー」と発音してごらんなさい」というように、発音の仕方を詳しく丁寧に教えていた。また、テキストには単語だけでなく、文章全体に発音記号が付けられていたという。

発音記号と言えば、昭和世代は発音記号を授業で習った覚えがあるだろう。筆記体（ハンドライティング）と共に今の授業では扱わない。発音記号については、発音記号のテストを行うような行き過ぎた記号学習に傾倒してしまう学校がでてきたこともあり、全体的に発音記号を教えることをやめ、その代わりフォニックスを教えるようになってきた。また、筆記体についても、タイプライターやワープロ、コンピューターの発展により、手書き文字に触れることが少なくなってきたからか、学校での面倒な指導が割愛されている。現在はむしろ装飾的な価値としてカリグラフィー教室などで教えられているようだ。この筆記体だか、今もう一度注目されている。それは、中学生の 10 人に１人といわれる読み書きに凸凹があるディスレクシアの人たちにとって光明となっているからである。従来教科書に印刷された活字体は、Ball & Stick 体といわれる球と線であらわされるアルファベットで、a は〇と｜でできており、o との誤認も多かった。また、p、q、b、d などが鏡文字に見えてしまう子もいる。そこで、Ball & Stick 体よりも筆記体に近い書き学習用欧文体が教科書に採用されるようになった。先ほどの a の〇の部分は手の動きを重視した、ちょっと水滴のような形状であり、大文字の K や R もなるべく少ない画数でかけるように配慮されている。また、初学者が手書きをするときに書きやすいように、４本線の真ん中が少し幅広になっている。これは、コクヨのキャンパスノートの英習罫でもまん中が広い英習罫が販売されており、実際に初期の英語のレッスンでこのノートを使うことで書き文字が安定し、その後スムーズに小さく書くことへ移行できている。このようなユニバーサルデザインの書体は、書体を開発した会社もそうだが、Windows 全機種に無料で搭載した Microsoft も普及に貢献している（教師用のフォントは有料提供しているのでそこは営利企業)。

基本文法から

岡倉のテキストではこの筆記体についてもペンの持ち方から印刷体、筆記体についての運筆順序から丁寧に進めていた。次に A、a [ei][æ][ə][a:] などの発音記号、ch などの合成記号、母音・鼻音・破裂音の発音記号を教えた後、数字を習う。そし

て最初に習う「文」は時間の聞き方、表し方である。時間から日にち、曜日、月ととても自然な段階的な進み方である。テキストの題材には、偉人、アラビアンナイトやイソップ寓話、ことわざや格言、詩など英語を話す人なら知っている教養が含まれていた。初等科の内容は後半になると内容が一気に高度になる。英語を学習し始めて半年くらいの学生が仮定法過去完了含む英文を習うのである。基本文法を早い段階で習得させ、一気に読解力を養うことを目指したようである。

と、ここまで調べてきて、はたと思った。この段階的な学習の進み方、突然難しい文法構文が出てくるところ、何かに似ているではないか。そう、このエッセイを長く読んでいる方ならご存知の、英国の言語学者オグデン（1889 － 1957）が考案したベーシック･イングリッシュ（以下ＢＥ）である。

人工言語運動とＢＥ

歴史をさかのぼっていくと、19 世紀末からエスペラント語をはじめとする人工言語運動があった。人工言語というのは、ラテン語以降の国際間のコミュニケーションを円滑に進めるために考案された言語である。エスペラント語は、1887 年、ポーランドの眼科医により「言葉の異なる人たちが、お互いを理解し、地球を平和にするために」つくられた。骨格を成す文法はたった 16 項目にまとめられ、語彙数も 900 程度、動詞の不規則変化がなくシンプルで理解しやすく、国際的平和主義という理念でも広がっていた。そのころ海外に行ってその流行を見聞きした二葉亭四迷（1864 － 1909）や、宮澤賢治（1896 － 1933）なども関心をもっていた。アジアでブームになり、大正デモクラシーの中、知識人や学生の間に浸透していた。ここに対抗したのが、オグデンのＢＥである。ＢＥというのは、1929 年にオグデンが考案した、わずか 850 語で２万語分に匹敵する意味をあらわすことができる簡素化英語である。オグデンは英語が事実上国際補助語としてすでに使われていること、人工言語がその指導者たちの覇権争いの素となり、ＢＥのような自然言語ではそのような懸案がないことなどを理由に戦っていた。

その頃の日本は、前述したように戦後復興期にあたり、日本の英語教育は一部の優秀な英語の使い手はいるものの、国際的には失敗していると評価されていた。オグデンは日本語が子音で終わることがないことを例に、伝統的な言語構造に英語教育の失敗の原因があるとした。当時、日本の文部省顧問で英語教授研究所所長として英語教育問題に尽力していたパーマーが選定した 3000 語についても、850 語の BE と比べて非効率性を主張し、生徒・学生だけではなく、すでに英語を学んでいる大人にとってもＢＥが効率的に完全にマスターできるメソッドであると主張した。またオグデンは、日本の漢字についても言及し、日本は多くの英語を外来語として受け入れ、表意文字が日本の発展に重要な役割を果たしてきたことを認めつつも、漢字の廃止を提言していた。（参考文献：広川由子「オグデンの普及戦略：日本の英語教育問題への関心を手がかりに」，愛知江南短期大学紀要 47（2018）PP. 47-56）

1927 年、日本では英語教育存廃論争が起こり、膨大な時間・労力・経費を費やしているにもかかわらず、英語力が向上していないことが国内でも問題視されていた。1931 年、岡倉由三郎は満州事変の直後の 10 月、日本政府を代表する「本邦美術使節」としてアメリカで開催された日本画展に派遣され、翌年１月からイギリスに行き３月末に帰国した。イギリスでは、主として英語教授法の視察を行い、一行はロンドンに到着するとオグデンのオーソロジー研究所を訪問する。そしてそこで岡倉は、行き詰っていた日本の英語教育を改革するための新しい試みとして、ＢＥは「日本にとって大いなる希望であり、ベーシックの考えを広めることに私の余生を捧げる」と語ったのである。

Do the hokey pokey

岡倉は、かつて英語圏の教養と発音教育、読解力を育て、英語の総合力の強化に真正面から取り組んだ。現代の英語教育で中学一年生のテキスト

の最初は、とにかく自己紹介である。自分を紹介するために必要なたくさんの単語、スポーツ、食べ物、趣味、地名を丸覚えし、「自分は…」「自分の〇〇は…」を練習する。そして、丸覚えできない生徒はあっという間に英語嫌いになっていく。コミュニケーション重視の「外国語能力」というにわかの実用性を重視するあまり、「国際共通語」としての理解が軽視され、それが英語力不足に至っていないだろうか。

岡倉はその後、教え子の高田力とともにＢＥの普及に貢献しつつ、またＢＥの限界も感じていた。一般的な英語話者と比べて単語数の少なさ、修正や変更を認めないオグデンのかたくなさ、志も半ば岡倉はこの世を去った。一時はロックフェラー財団からの支援も得て、ＢＥの学校を作る計画もあったという。

「我々はなぜ英語を学ぶのか？」という岡倉の問いの答えは、われわれの意思や感情を発表し、また世界各国の知識や経験を吸収するため、母国語を助ける道具として英語を学んでいるのである。これからも「Ｗｏｒｌｄ Ｅｎｇｌｉｓｈ」につながるような視点をもって、英語を学んでいきたいと思う。

（たかの ゆうこ：医学系研究所図書室）